

町民文芸



只見短歌会

令和八年八月詠草

目黒 富子
独り身で老いゆくかと子を案じゐるその母親に言葉出でこず

関谷登美子

日常に入ることなき林など走る列車の窓より眺む

立花 奏音

夏名残スイカ食む息子が種つまみ蒔けばひらくとまなこ輝く

新国由紀子

缶ジュース開くる真似飲む真似捨つる真似一歳の孫いづこで覚ゆ

渡部ヨリ子

県外の豪雨のニュース流るれば我が住む町の災害思ふ



只見俳句会

八月定例会

都
挨拶は白い齒キラリ夏休み
夏空やチーム一丸に白球は飛ぶ

味代子

老いし齒の一喜一憂冷し麦
返納をするか否かの酷暑かな

真理子

母もぎあの子とあの子を思いつつ
芋の花紫めくカフェに一人

睦子

夏風やお盆も近しせみの声
掛軸は静一文字で夏の夜

尚幸

こがねむし
金亀子ぶつかる音や家の窓
蝉時雨湖畔をかける子供達

理恵子
螢飛ぶ引越して来て早九年
アジサイ
紫陽花やぱつりぱつりと人も増え

一恵

この峠下れば我が家百合の花
全山を揺るがしている蝉時雨

修一

送り火や尽きてカタリと落ちる音
霊柩車緋鯉真鯉も見送りて

信

川霧の漂う朝や山ねむる
秋来ぬと只見の山に風渡る

